



# ショートコメント

★★★★

Data 2025-85

## ひめゆりの塔

1982年/日本映画

配給：東宝/142分

2025 (令和7) 年9月7日鑑賞

シネ・ヌーヴォ

監督：今井正  
 協力監督：神山征二郎  
 脚本：水木洋子  
 出演：栗原小巻/古手川祐子  
 /大場久美子/斉藤  
 とも子/嵯川有紀/  
 田中好子/牛原千恵  
 /篠田三郎/下条ア  
 トム/田村高廣

### みどころ

私は吉永小百合主演の『あゝひめゆりの塔』(68年)をTVと劇場で2度鑑賞したが、今井正監督の53年版も82年版(本作)も観ていないし、95年版も観ていない。したがって、シネ・ヌーヴォが「戦後80年記念」として開催した「決定版!日本の戦争映画史」で上映されると知ると、こりゃ必見!

20歳そこそこの吉永小百合のひめゆり学徒隊員姿はすごく良かったが、栗原小巻の先生役もグッド!古手川祐子、大場久美子、田中好子等の女生徒陣が新鮮なら、篠田三郎の(若き)先生役もお似合いた。

1972年に沖縄の本土復帰が実現したため、今井正監督はあえて82年版(本作)で、53年版ではできなかった沖縄での現地ロケにチャレンジしたそうだが、その是非は?また、53年版で多用されていたらしい艦砲射撃等のニュース映像は本作でも使われているが、それらが作品の是非にどこまで影響するかは微妙だ。それらに対比したサイトもあるから参考にしたいが、それ以上に、本作は何よりも、心で読み解くことが大切!

さらに、私にとっては、2019年11/17~19の沖縄旅行での南部戦跡巡りにおける“糸数アブラチラガマ”の見学が大きなインパクトになった。それとの対比で、ラストには思わず涙が溢れ出たが、そりゃ仕方なし!戦後80年間も平和で長生きできている自分の幸せとひめゆり学徒隊の悲劇を自分なりにしっかり重ね合わせながら、「先の大戦」を考え、9/7の辞任表明で慌ただしく動き始めた、自民党の総裁選びの(バカバカしい)姿をじっくり観察したい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

◆「ひめゆり学徒隊」を描いた映画は、過去次の4作があるが、私は②を2回鑑賞しただけ(『シネマ47』245頁、『シネマ57』209頁)で、他の作品は未鑑賞のままだった。

- ①『ひめゆりの塔』(53年)
- ②『あゝひめゆりの塔』(68年)

③『ひめゆりの塔』(82年)

④『ひめゆりの塔』(95年)

もっとも、ドキュメンタリー作品としての『ひめゆり』(06年)もあり、私はこれも鑑賞している(『シネマ15』246頁)。

◆上記4本のうち最も古いのは、1945年の終戦からわずか8年後の1953年に作られた今井正監督の『ひめゆりの塔』。Wikipediaによれば、同作は創立早々の東映で製作されて大ヒットし、600万人の観客を集め、東映の経営は軌道に乗ったそうだからすごい。出演陣が津島恵子、岡田英次、殿山泰司、香川京子等々と聞けば、「その時代」が分かるというものだ。

◆興味深いのは、同じ今井正監督が、同じ『ひめゆりの塔』のタイトルで82年版を監督していること。それが本作で、女優陣は栗原小巻、古手川祐子、大場久美子、田中好子等、男優陣は篠田三郎、下条アトム、田村高廣等だから、82年版はバブル時代を謳歌していた私にはおなじみの俳優陣ばかりだ。

そんな本作が、シネ・ヌーヴォーが「戦後80年記念」として開催した「決定版！日本の戦争映画史」で上映されると知ると、こりゃ必見！チラシでの同作の紹介は右のとおりだ。



◆栗原小巻は80年代を代表する演技派の美人女優だが、67年版で主演した吉永小百合がひめゆり学徒隊の一員だったのに対し、82年版における栗原小巻はひめゆり学徒隊を引率する宮城先生役だから、それに注目！67年版では先生役を演じた二谷英明の奮闘ぶりが印象的だったが、本作では宮城先生役の栗原小巻と玉井先生役の篠田三郎に注目したい。

他方、私は風吹ジュン、秋吉久美子等の美人女優が大好きだが、まさにその延長線上にある(?)美人女優・古手川祐子がひめゆり学徒隊の一員・上原文役として本作に登場しているので、それにも注目！

もちろん、本作の女優陣は全員美人だが、その美しい顔にあえて泥を塗り、ボロ着を着て、へろへろになりながら生死の境の中で逃げ惑う姿を演じている。しかし、それでも美人は美人だから、不謹慎ながら、その点のお楽しみはしっかりと。

◆53年版と82年版は水木洋子書いた同じ脚本に基づいているため、ストーリーはほぼ同じだそうだが、大きく違うのは、1972年に沖縄の返還、本土復帰がなったため、53年版では不可能だった沖縄現地ロケを82年版では行っていることだ。もっとも、そのことの是非は人によって違うようだから、しっかり自分の目で確認したい。

◆本作や上記4作についてのネタバレ情報は多いが、この4本を比較した「映画『ひめゆりの塔』あらすじネタバレ感想評価まで 戦後80年企画レビュー～1953年版・1982年版・1995年版・『あゝひめゆりの塔』1968年版まで比較します」があったので、私はこれに注目！前記のとおり、私は68年版しか観ておらず、しかも82年版を観るのが今回はじめてだから、このサイトを全面的にコメントすることはできないが、これは大いに参考になった。ちなみにここでは、67年版について「主役の吉永小百合が、飛び抜けてキュートです。吉永小百合は時代を超えたヒロインだ、というのわかりますね。」と書いていたが、私はこれに全面同意！他方、「吉永小百合爆死エンディングにはどうも納得がいきません。当時、世のサヨリストの皆さんは、このエンディングにどう感じたのでしょうか・・・。」には、私は不同意だ。あれはあれで、エンディングとして私は十分納得だ。また、「この1995年版以外の作品は、『ひめゆり部隊の生徒たちは全員亡くなったのか・・・』と思わせるようなラストなのですが、神山作品だけが、いわゆる『一部の彼女たちのその後』を書いているという点で、目指したところが違います。」の意見を讀むと、「95年版も必見！」との思いを強くすることに。

◆1967年から71年までが私の大学時代だが、私はこのうち前半の3年間を学生運動に明け暮れた。その闘争テーマは、ベトナム戦争反対、佐藤訪米阻止等の他、沖縄を返せ！等があった。佐藤栄作政権の下で1972年に沖縄の本土への返還が実現したのが、そんな運動の成果だったのかどうかは別にして、沖縄の本土復帰がなったことは喜ばしいが、さて、その後の沖縄の置かれた状況は？高校野球における沖縄勢の躍進ぶりは見事で喜ばしい限りだが、それ以外に沖縄には何もいいことはなかったのでは？それに追い討ちをかけたのが、2019年10/31に起きた首里城の炎上だ。

私がかねてよりの念願だった沖縄旅行に出かけたのは、その直後の2019年11/17～19。1日目は守礼門と焼け落ちた首里城を見学、夕方は国際通りを端から端まで歩いた。そして2日目は南部戦跡巡りで、①旧海軍司令部壕、②ひめゆりの塔と資料館、③平和記念公園を見学。圧巻は④糸数アブチラガマだった。そんな沖縄旅行でのアブチラガマ体験をしてきただけに、とりわけ本作後半のガマのシーンは生々しく感じることができ、思わず涙が・・・。

2025（令和7）年9月10日記